

HATAN BARU
旗 原 遺 跡

久留米市文化財調査報告書 第133集

1998

久留米市教育委員会

I. はじめに

a. 調査に至る経過

調査は、平成9年4月21日、開発行為者中島田精機株式会社代表取締役社長中島田忠義氏より久留米市荒木町大字下荒木字旗原における埋蔵文化財の包蔵地確認調査依頼書の提出にはじまる。5月11日、試掘調査を実施したところ、遺構・遺物の出土を確認したため、当該地に遺跡が存在する旨を通知した。その後、開発行為者中島田氏との間で数度の協議をかさねた結果、工場建設の部分に関しては発掘調査を実施し、駐車場部分については保存調整を行うことで合意した。平成9年7月22日付けで、久留米市と中島田氏との間に埋蔵文化財発掘調査委託契約書を取り交わし、ただちに発掘調査に入るはこびとなった。

b. 調査体制

調査主体：久留米市教育委員会	教育長 桑野 善吾	
調査総括：教育文化部	部 長 坂田 博春	社会教育担当部長 矢次 敏孝
文化財保護課	課 長 古賀 幸男	主 査 萩原 裕房
	埋蔵文化財主査 櫻井 康治	文化財主査 松村 一良 (試掘調査担当)
庶務担当：	古賀 直喜	
調査担当：	大石 昇	
調査委託：中島田精機株式会社	代表取締役 中島田 忠義	
発掘調査臨時職員	荒巻美智代・井上喜代香・緒方喜代子・川島悦子・川島トシエ・川島利勝・ 川島ハルカ・川島弘文・川原沙綾子・川原セキヨ・古賀清司・末安ヨシミ・楢原初美・平島ツヤカ・ 深川幾代子・藤木幸子・船津寛子・本田一孝・本田ヒサヨ・本田安義・丸山幸・野口カオル・山科薫・ 渡辺しげ子・(学生) 濱田一宏・松浦智	
発掘調査整理非常勤職員	米澤美詠子	臨時職員 荒巻悦子・龍直美

c. 調査の経過

調査は、工場建設で削平される南西部を中心に実施した。平成9年7月28日、重機による表土除去作業を開始。続いて包蔵層の除去作業を行った。7月29日より、発掘器材の搬入・テント設営を行い、遺構検出作業を始める。検出作業と平行し、平板による遺構略図(1/50)作成を行った。8月4日、東側から遺構の掘り下げを実施した。東側では遺構の密度が稀薄で、西側に行くに従い漸次多くなる傾向にある。発掘作業は地元の初めての人々が多く、慣れる意味でこの東側部分からの調査となったが、大雨やお盆休みが間にはいり、本格的な調査は盆明けとなった。8月19日、お盆休みも終り、再度テント設営を行い、調査を再開した。8月21日、中央付近の掘り下げに移ったため、東側の割り付けを開始し、遺構実測を平行して行った。8月25日、調査が思うように進まず、本日より作業員を増員して発掘作業の迅速化を図る。9月2日、溝・土坑を残し掘り下げ終了のため、全体の清掃に移る。9月4日、スカイ・マスターによる全体および掘立柱建物跡の写真撮影を行う。9月13日、遺構実測およびエレベーションを終了し、テント撤収作業を行い、現地での作業を終了する。この間、事務所にて遺物整理を並行して実施した。

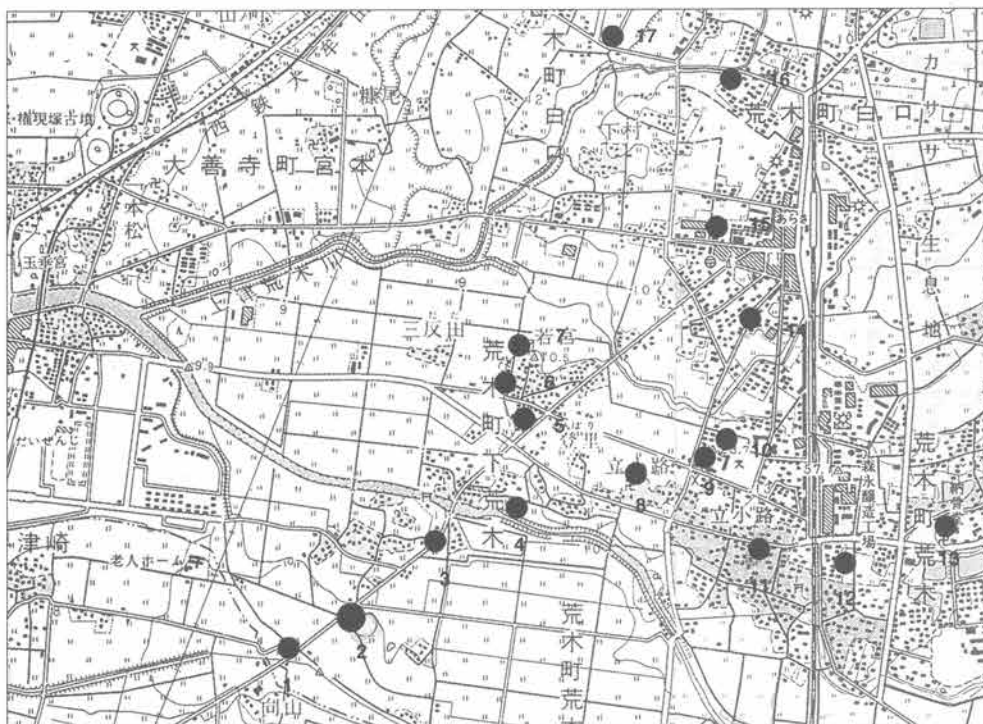
Ⅱ．遺跡の立地と周辺の遺跡

a. 遺跡の立地

旗原遺跡は、久留米市の南西端の三潞郡三潞町と接する荒木町下荒木字旗原1502他に所在する。遺跡の直ぐ北には、筑後川に注ぐ広川が蛇行を繰り返しながら西流する。付近一帯は、耳納山地から西に派生する緩やかな丘陵部の最先端部と、九州第一の河川である筑後川に注ぐ幾つかの小河川によって開析される肥沃な平野部との接点にあたる。遺跡はこの丘陵の最先端部に位置するものと思われるが、北および南西側では低地が大きく入りこむ地形をしている。標高は8.8mで、低地との比高差は1～2m前後である。

b. 周辺の遺跡

旗原遺跡は筑後平野の穀倉地帯にあって、『六江』『横枕』『ハノ江』『用ノ坪』などといった条里制（三潞郡条里）の名残をとどめる字名がまわりに点在する。周辺部での発掘調査は水田地帯であるために意外に少ない。南西方には、古墳時代の竪穴住居跡が検出された一の左右遺跡（昭和58年・平成7年調査）があり、現在も第5次調査として実施中である。また、広川を隔てた北東方には、鬼木・寺脇といった弥生時代の集落遺跡や同名の古墳群などが点在する。なかでも、鬼木遺跡は第2次の調査が本年度に実施されているが、江戸時代の末には広形銅鉾が出土している。筑後地方では数少ない出土例である。寺脇遺跡は、鬼木の東に隣接する遺跡で、昭和36年（1961）、九州大学の鏡山猛氏らによって一部調査がなされている。検出遺構は、弥生時代中期の竪穴状遺構・甕棺墓・箱式石棺墓と平安時代の住居跡である。さらに東方には、現在消滅してその全容は不明であるが前方後円墳と推定される二子塚古墳や変形獣帯鏡の出土が伝えられる鷲塚古墳がある。また、字立小路一帯には、鎌倉御家人として荒木に土着した荒木近藤氏（龍造寺の一族と称する）代々の館跡が推定されている。



1. 一の左右遺跡
2. 旗原遺跡
3. 三川古墳
4. 立毛古墳
5. 鬼木遺跡
6. 鬼木1号墳
7. 宮脇遺跡
8. 寺脇遺跡
9. 二子塚遺跡
10. 二子塚古墳
11. 近藤氏館跡
12. 小寺遺跡
13. 鷲塚古墳
14. 追敵遺跡
15. 白口経塚遺跡
16. 白口西屋敷遺跡
17. 向定覚遺跡

第1図 周辺の遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ．検出遺構と出土遺物

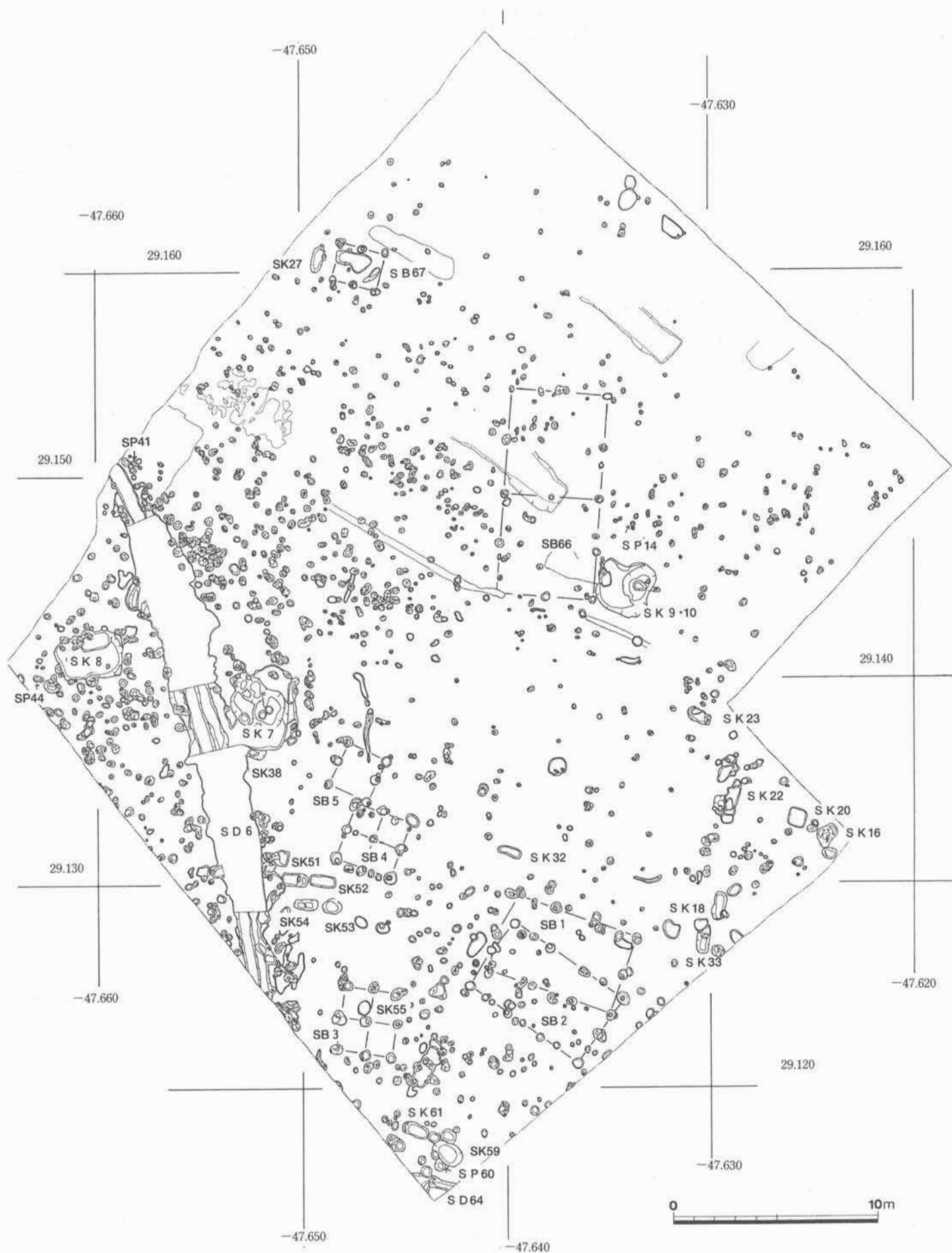
a．検出遺構

調査は、工場建設予定地と後年に増築が予定されている部分についてのみ実施した。北西および北東側の水田は調査地点との比高差が50～80cmあり、今回の対象からは外した。調査区は南北約40m、東西約40mの略L字形で、調査面積は1400㎡である。南西部に遺構が集中する傾向にあり、北東部は稀薄である。主な検出遺構は、掘立柱建物跡7棟・溝2条・大小の土坑20基であるが、南西部ではピットが集中し、部分的に列状をなすことから、建物や柵列などがさらに増える可能性もある。

層序は、水田耕作土・床土の表土が約30cm。表土下、南西端部で35cmの暗褐色粘質土の包含層が認められた。北東部分は包含層は無く、表土下は直接地山となっている。北東部に行くに従い、緩やかではあるが地山面が高くなっており、10cm程の比高差がある。水田開発によって削平を受けたものと推測される。



第2図 調査地点位置図 (1/5,000)



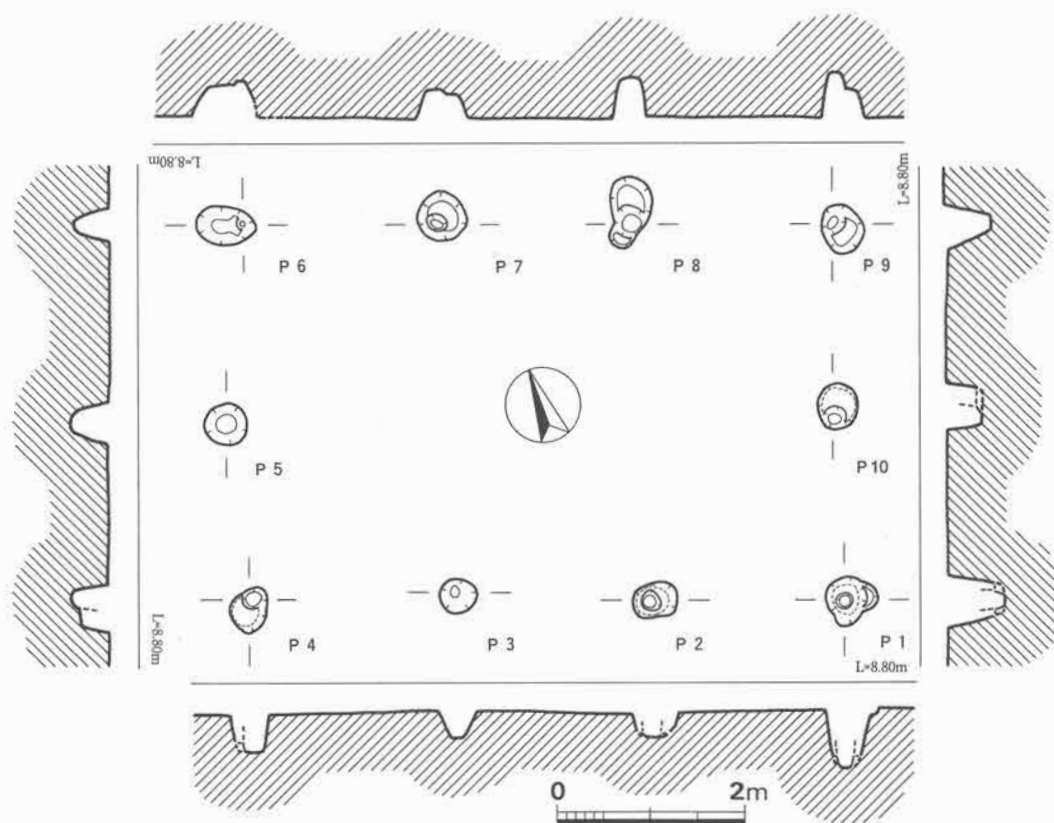
第3図 遺構配置図 (1/250)

掘立柱建物跡

合計7棟の掘立柱建物が検出されている。2間×4間の南北棟建物が1棟、2間×3間の東西棟建物が2棟、2間×2間の総柱建物が2棟、1間×2間の建物が2棟である。東西棟建物と総柱建物および1間×2間の建物の3棟が、住居・倉庫・作業小屋として同時期に存在した可能性が高い。

SB1（第4図、図版2）

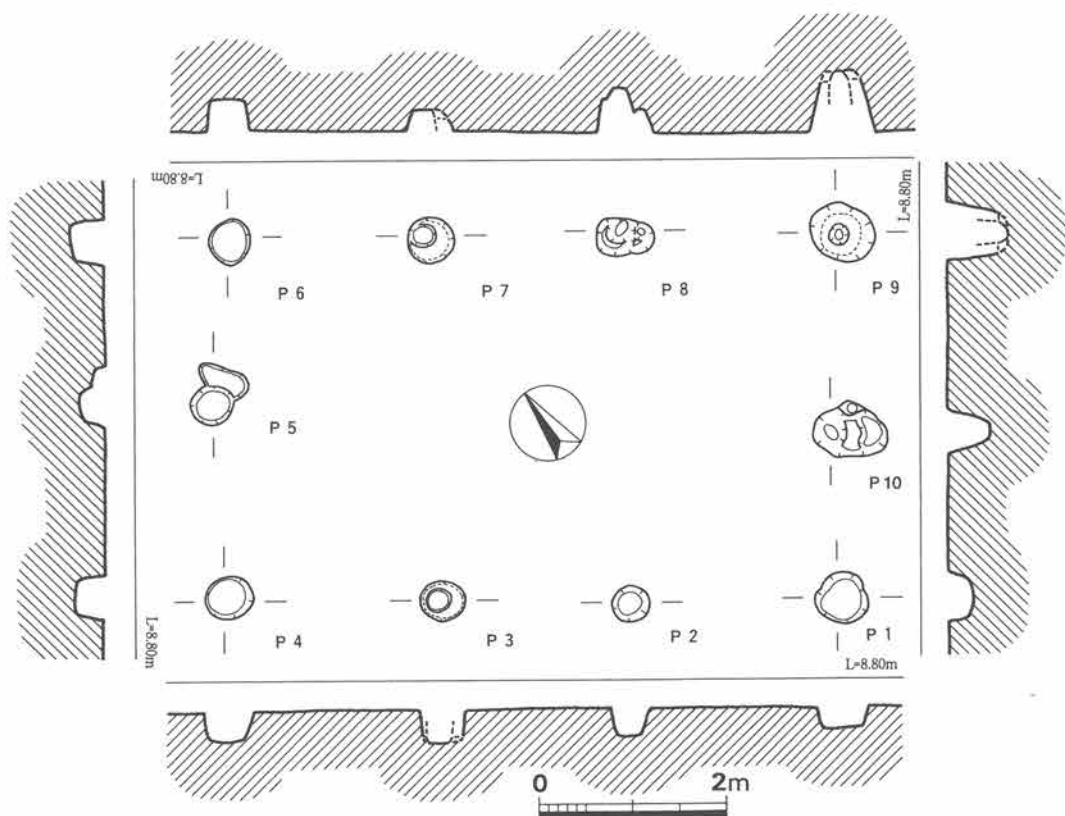
調査区の南側で検出した2間×3間の東西棟建物である。柱筋はほぼ揃うものの、西側柱の桁柱が20cm程外へ飛び出している。建物の規模は、桁行640cm、梁行400cmを測る。柱掘形は円形ないし楕円形を呈し、径40～50cm・深さ30～60cmを測る。柱の規模は、掘形底面近くで検出された柱痕跡のピットP1・P2・P4・P7・P10などから20～25cmと推測される。出土遺物は少なく、土師器の坏・甕、須恵器の坏蓋などがある。SB2と重複するが、柱穴間には切り合いがなく、出土遺物にも差が認められないことから、先後関係は不明である。出土遺物から7世紀後半の建物と推測している。



第4図 SB1実測図（1/80）

SB2（第5図、図版2）

SB1の南で検出した。SB1と同規模の2間×3間の東西棟建物である。やはり、西側柱の桁柱が若干西へ膨らむ傾向にある。桁行650cm、梁行390cmを測る。柱掘形は円形ないし楕円形で、直径40～50cmを測る。柱穴の深さには、ややばらつきが認められるものの、深さ20～65cmを測る。柱の大きさは、P3・P7・P9より、約25cm程が推測される。出土遺物は僅かで、土師器で丹塗り暗文を施す坏や甕の細片が出土している。7世紀後半代の建物と考えている。



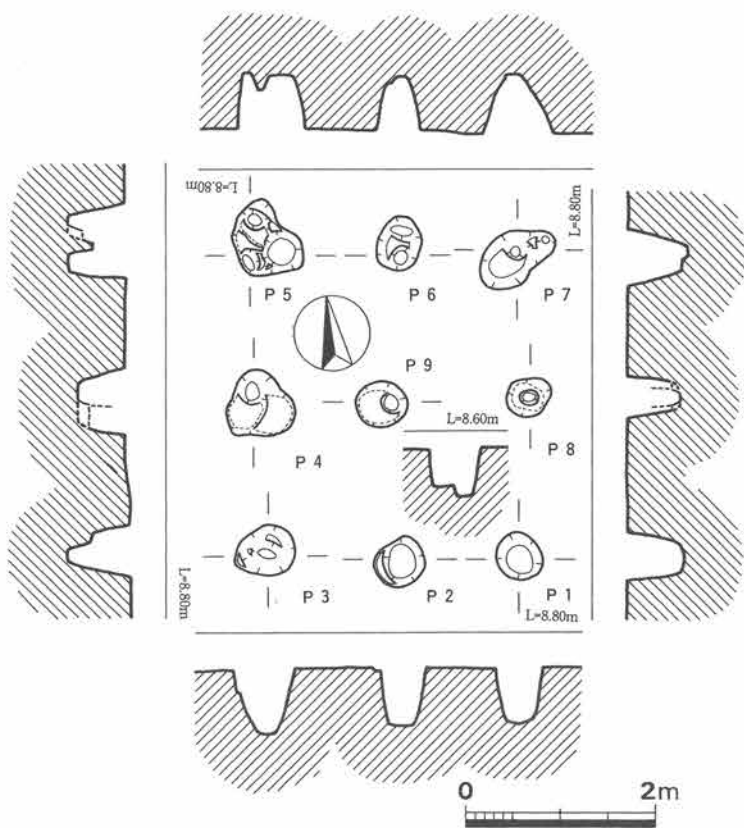
第5図 SB2実測図 (1/80)

SB3 (第6図、図版3)

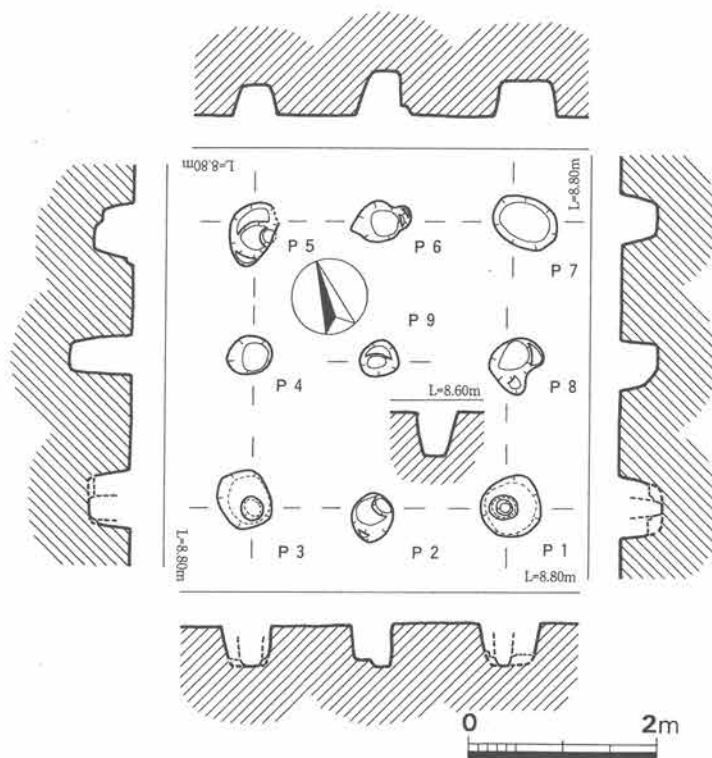
南端に検出した2間×2間の総柱建物。規模は、東西290cm・南北320cmを測り、やや南北が長い。柱掘形は円形ないし楕円形で、直径45~60cm、深さ50~70cmを測る。柱筋は一直線には揃わず、ややばらつきが認められる。柱の大きさは、P8・P9より、直径25cm前後を推測している。出土遺物は土師器の甕の細片が数点しかない。この建物は倉庫と考えられ、先のSB1或いはSB2と対になる建物である。

SB4 (第7図、図版3)

SB3の北に検出した、2間×2間の総柱建物である。SB3と同規模・同様の構造物であろう。東西270cm・南北300cmを測る。やはり南北が少し長くなっている。柱掘形は円形ないし楕円



第6図 SB3実測図 (1/80)



第7図 SB4実測図 (1/80)

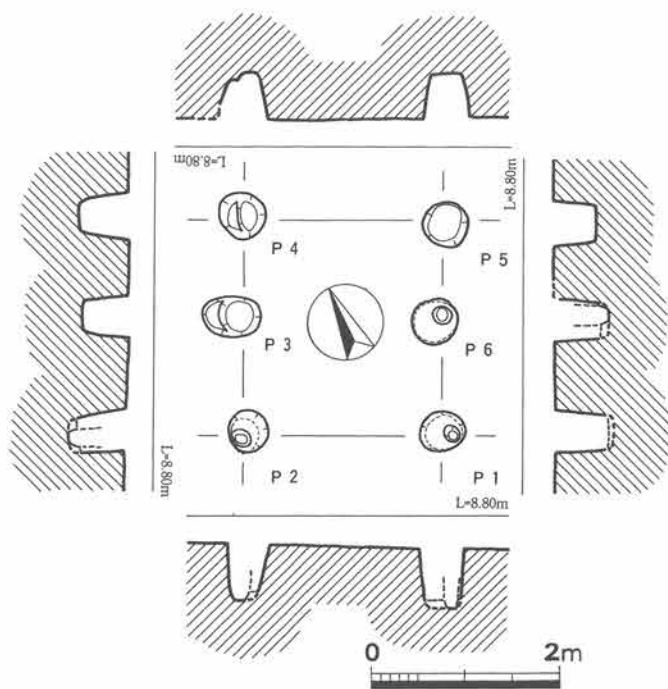
形で、直径40～70cm、深さ40～65cmを測る。柱筋はほぼ揃っており、柱の大きさはP1・P3より、直径25cm前後が推測される。北東隅でSB5と接するが、先後関係は判然としない。土師器の丹塗り高坏や甕・鉢の細片が出土しており、SB3と同時期の7世紀後半代を考えている。

SB5 (第8図、図版3)

SB4の北西隅に接して検出した1間×2間の掘立柱建物である。規模は、東西210cm・南北230cmを測り、南北がやや長い。東西が1間で、かつ、南北が若干長いので、南北棟建物と考えている。柱掘形は円形に近く、直径45～50cmを測る。深さはほぼ一定で揃っており、50～60cmを測る。柱筋も並んでいる。柱の大きさはP1・P2・P6より、直径20cm程度を考えている。この建物は総柱ではないが、規模や形状から作業小屋或いは総柱建物と同様の倉庫と想像される。

SB66 (第9図)

中央の北東寄りに位置する2間×4間の南北棟建物。本遺跡では最大の掘立柱建物である。規模は桁行1000cm・梁行は470cmを測る。柱掘形はほぼ円形で、直径40cm前後・深さ10～35cmを測る。中央に間仕切りの柱穴があるが、床柱としての柱穴とも考えられる。柱穴が全体的に浅いのは、中央から北東部分にかけては包含層がなく直接耕作土となっていたためで、後世に水田となる際に削平を受けたものと推測される。この建物は、調査終了後の遺構検討中に判明したこともあり、柱穴が浅いこともあいまって、柱痕跡等は不明であるが、全体的に見て柱穴が小さく、東西棟の建物と比べ、貧弱な感じを受ける。なお、南西隅の柱穴(P3)部分は、西側から延びる近世の溝状の攪乱により破壊されている。出土遺物は少なく、土師器の甕や細片が僅か



第8図 SB5実測図 (1/80)

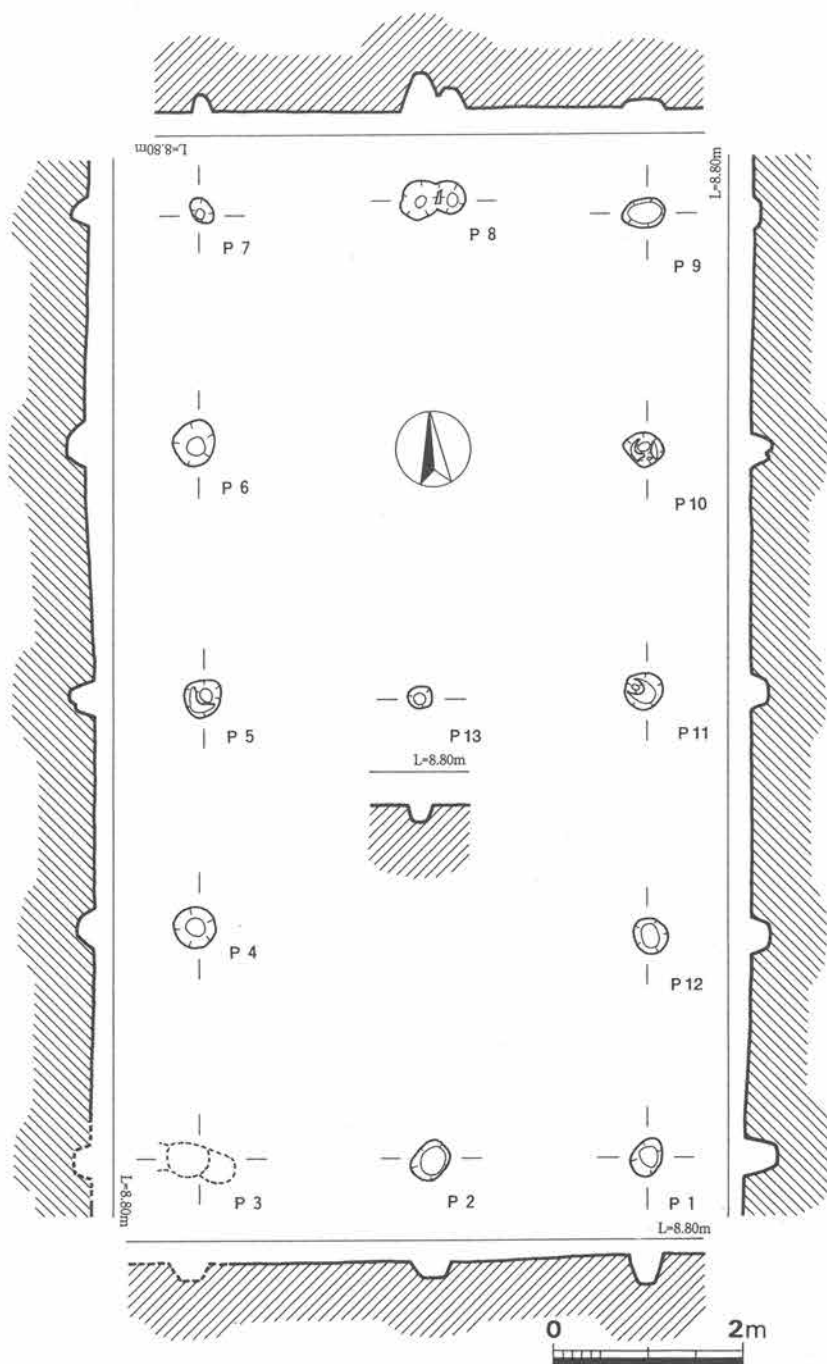
時期決定に欠けるが、先述した東西棟建物より後出し、8世紀代と考えている。

S B67 (第10図)

S B66の北西部に位置する1間×2間の東西棟建物である。この建物もS B66と同様に調査終了後に判明した。規模は、東西210cm・南北190cmを測る。柱掘形は、径35～45cmの楕円形で、深さは10～30cmと浅い。S B5と棟方向は異なるが、ほぼ同形・同規模の建物であり用途もS B5と同様のものを想定している。土師器の甕の細片が1点出土している。

溝

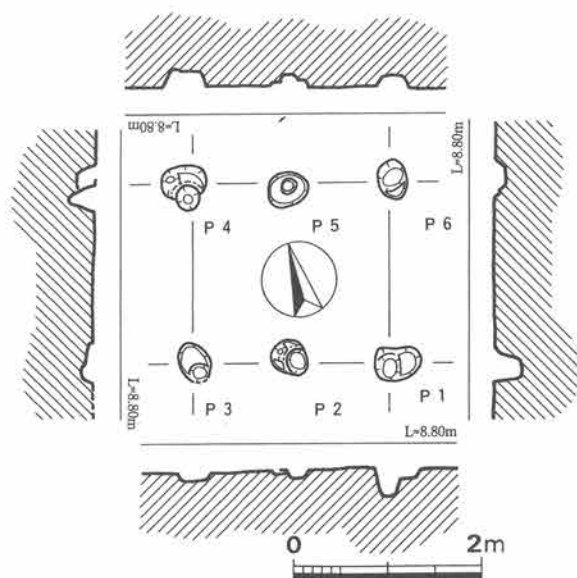
西側および南端部で2条の溝を検出した。S D6は、調査期間の制約上、完掘できなかった。南北の両端および中央部に3箇所のトレンチを設定し、調査を実施した。S D64は規模も小さく調査区のコーナー部分での僅かの検出で、全体を把握できなかった。



第9図 S B66実測図 (1/80)

S D6 (第3図参照、図版3)

西端部で検出した。全長約27mを確認。やや東に弧状に膨らむ南北走行の溝である。南・北の端部と中央部にトレンチを設定し、掘り下げを行った。溝幅200cm前後、深さ約50cmを測る。溝は二段掘りで、西側に幅70～80cm・深さ20cmのU字形の一段深い溝が走る。溝底はほぼフラットで、北端より南端が低い。溝は一時的に埋まったものと推測される。埋土は暗黒褐色土で遺物を多く含む。弥生の高環、土師器の坏・皿・甕・甑、須恵器の坏・坏蓋・壺・甕・転用硯、土錘、石鏃、砥石などが出土している。弥生時代の遺物は数点で、概ね7世紀後半から9世紀初頭の遺物で構成される。



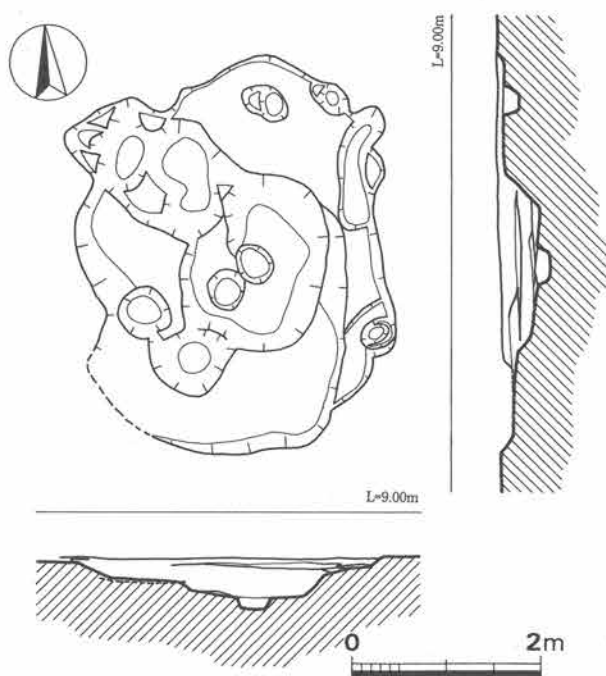
第10図 SB67実測図 (1/80)

SD64 (第3図参照)

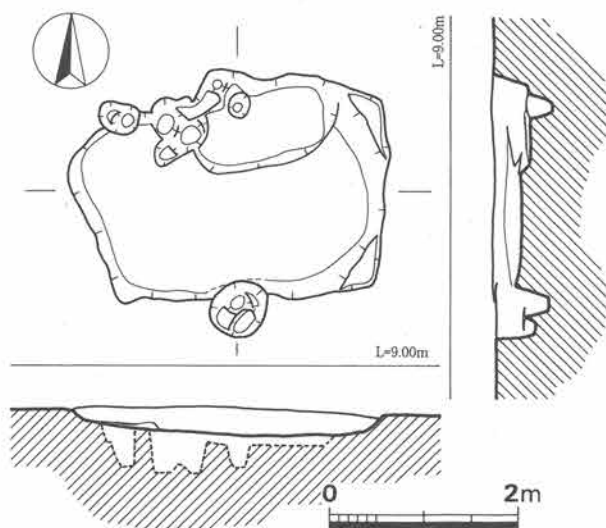
南端のコーナー部で検出した。幅40cm・深さ20cmで、断面はU字形を呈する。西端部では別の土坑との切り合いがあるかもしれない。土師器の鉢・甕・甕把手のほか、土錘が8点出土している。

土坑

大小合わせて20基の土坑が検出された。不整形の大きな土坑4基（2基は重複）と小土坑16基からなる。小土坑の内、SK27は土壌墓の可能性が大きく、SK18・33・51・52なども形状からその可能性がある。SK55は焼成遺構、SK59・61は土器の廃棄遺構である。土坑は南東部および西側付近に集中し、遺跡がこれらの方向に拡大する傾向にある。



第11図 SK7実測図 (1/80)



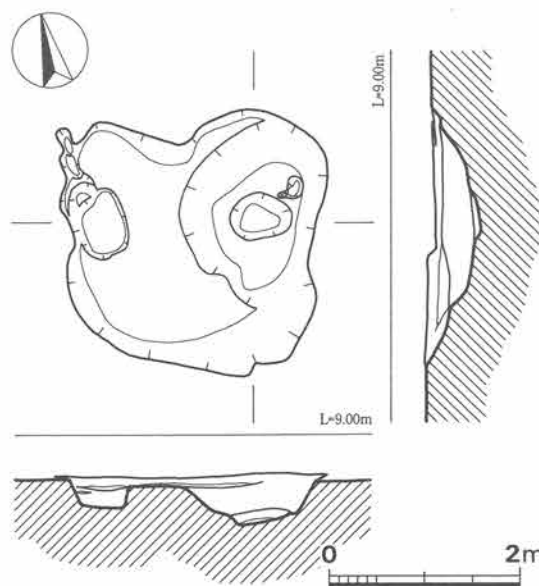
第12図 SK8実測図 (1/80)

SK7 (第11図、図版4)

西寄りに検出した不整形の大きな土坑で、SD6の東側に位置する。平面は楕円に近い形状で、中央部が一段深くなっている。西端はSD6と接する。規模は、東西320cm・南北420cm・深さ50cmを測る。遺構内に、直径40~50cmのピットが数個存在するが、この土坑に伴うものかは不明である。埋土は単純な暗黒褐色粘質土で、一時期に埋まったものと推測される。出土遺物は、遺構の大きさの割にはそう多くはない。土師器の坏・皿・甕、須恵器の坏・坏蓋などが出土しているが、土師器の甕の破片が多数を占める。7世紀後半の時期を考えている。

SK8 (第12図、図版4)

西端部に検出した長方形の土坑である。東西340cm・南北230cm、深さ30cmを測る。中央北寄りに150×90cm・深さ10cmの長方形の一段深い部分が認められる。埋土は先述のSK7と同様である。出土遺物には、土師器の高坏・皿・甕、須恵器の鉢・坏などがあるが、SK7と同様に、甕の占める割合が大きい。やはり、7世紀後半の時期と考えている。



第13図 SK9・10実測図 (1/80)

SK9・10 (第13図、図版4)

北東寄りに検出した土坑で、2基が重複する。SK9は不整形の浅い土坑で、一辺が230cm前後、深さ10cmを測り、西端に楕円形のピットがある。SK10は楕円形状のやや深い土坑で、210×150cm、深さ50cmを測る。埋土は、SK10が黒色の粘質土、SK9が黒色の粘質土に褐色のブロック土が混入する。共に、出土遺物は少なく、土師器の甕の細片が多い。7世紀後半から8世紀代の時期と考えている。先後関係は判然としないが、SK10が先行するものと思われる。

SK27 (第3図参照、図版5)

SB67の西に検出した。長楕円形の土坑で、長軸は南北方向を示す。規模は、長辺130cm・短辺57cm、深さ10cmを測る。中央南東端に土師器の皿が出土している。副葬されているようにもとれる。出土遺物はこれ以外になく、大きく削平を受けていることなどを考慮すれば、土壌墓の可能性が大きい遺構である。

SK55 (第3図参照、図版5)

南端のSB3の中に位置する。形状は楕円形で、規模は61×73cm、深さ約20cmを測る。比較的浅い土坑である。壁面は赤く焼け、一周する。土層は上下2層に別れ、厚さ12cmの上層は焼土を多く含み、下層は木炭を多量に含む。出土遺物は数点の土師器細片が検出されているのみで、時期決定に欠けるが、7世紀代の焼成遺構と思われる。

SK59 (第3図参照、図版5)

南端コーナー部で検出した楕円形の土坑である。周辺部は数個のピットと接する。長軸は東西方向を示す。規模は、110×155cm、深さ40cmを測る。焼土を含む暗褐色の埋土からは多量の遺物が出土している。土師器の坏・坏蓋・皿・鉢・甕・甑・片口、須恵器の皿・坏蓋、土錘などで、概ね8世紀前半代の時期が考えられる。廃棄土坑の性格が強い遺構である。

SK61 (第3図参照、図版5)

SK59の西隣に位置する。東西に長軸を持つ楕円形の土坑で、隅丸長方形に近い形状である。西側に段を持つ。SK59より一回り小さく、規模は63×135cm、深さ25cmを測る。出土遺物はやや多い方で、土師器の坏・皿・鉢・甕などの他、弥生の甕の底部が1点出土している。やはり、8世紀前半代の時期で、廃棄土坑と考えている。

b. 出土遺物 (第14・15図、図版6～8)

全体的に見て出土遺物は余り多くはない。溝を完掘しなかったこともあり、南端部の土坑が多量に出土したくらいで、北東部のピットなどでは土師器の細片が数点ずつといった出土状況である。概ね、7世紀～9世紀代の土師器で、特に、甕類が多いのが特徴的である。須恵器は少ない。また、弥生土器は10点にも満たない。土器以外では、土錘・鉄刀子・砥石と弥生時代の石鏃・石包丁などが出土している。

1は須恵器の蓋の小片。内外面は回転ナデを施す。良く焼き締まり濃灰色を呈する。SB1のP8出土。

2は土師器の丹塗りの坏。口唇部が外反する器形で、内面はミガキに細く浅い沈線を施す。外面は丹が僅かに残存する。淡茶褐色で、焼成は良好。SB2のP10から出土している。

3は返りのある須恵器の蓋の小片。内外面共に回転ナデを施す。焼成は良く、暗灰色を呈する。

4は須恵器の蓋。嘴状を呈するが、端部は丸味を持つ。胎土に長石を多量に含む。焼成は良好で、淡灰色を呈する。内面に重ね焼きの痕跡が顕著に残っている。

5は須恵器の蓋。天井部は回転ヘラ削り後ナデ、端部は回転ナデを施す。長石の細粒子を僅かに含み、焼成は良好で、淡灰色を呈する。内面に重ね焼きの跡が顕著に残る。この蓋は硯に転用しており、内面中央部は摩滅が著しい。

6は高台付きの坏。低い張付け高台の高台径は大きい。体部内外面はナデおよび回転ナデ調整。色調は暗灰色。焼成は良好で、良く焼き締まっている。内面や高台内に黒色のガラス質の斑点が認められ、体部外面には降灰による自然釉が掛かっており、伏せ焼きを行った状況が想定される。また、高台内には重ね焼きの痕跡も顕著に認められる。

7は土師器の坏。体部中位がやや膨らんでいる。底部はヘラ切り後ナデ調整。赤色粒子を含む。焼成は良好で、淡橙茶色を呈する。

8は手持ちヘラ削りを施す坏。口縁部が外反する器形で、口唇部は丁寧な回転ナデを行っている。胎土に若干の長石・石英細粒子を含む。淡黄褐色～橙褐色を呈している。3～8はSD6の出土である。

9は返りを持つ須恵器の蓋。天井部はヘラ切りのみ。ヘラ記号「×」の線刻が微かに窺える。胎土に長石の細粒子を多く含み、濃灰色を呈している。

10も返りを持つ須恵器の蓋。小片で、胎土に多量の長石細粒子を含む。焼成はあまい。

11は手持ちヘラ削りの土師器坏。内面は丁寧な回転ナデ。胎土には良く精製された土を用い、強く焼き締まっている。底部に焼成前に施す、「×」のヘラ記号がある。

12は土師器の小形の甕。体部外面は細かい縦方向の刷毛目を、内面はヘラ削りを施す。胎土は精良で、灰茶褐色を呈する。9～12はSK7出土。

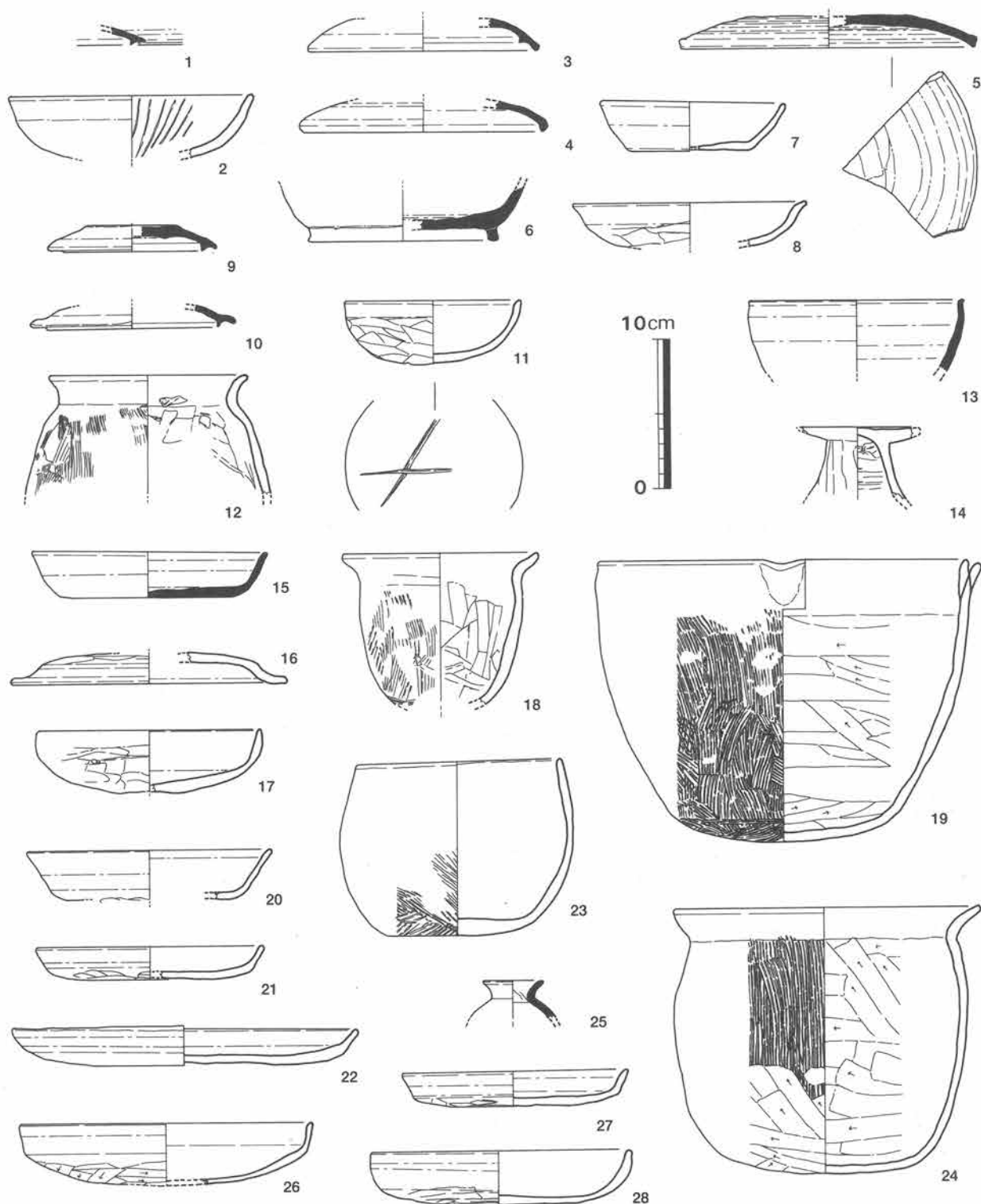
13は須恵器の鉢。口縁部から体部にかけの破片。底部が欠損し全体は不明だが、口縁部が屈曲する鉄鉢状に近い形状である。胎土に長石粒子を含み、焼成は良好である。灰色～暗灰色を呈する。

14は土師器の高坏の脚部片。縦方向のヘラ削りが顕著に認められる。胎土は精良で、赤色粒子を多く含む。焼成は良好。淡橙褐色を呈している。内面にヘラ記号がある。13と共にSK8出土。

15は須恵器の坏。ほぼ完全に近い。胎土に長石・石英粒子を若干含む。焼成が甘く、土師器に近い灰茶色を呈している。

16は土師器の蓋。皿の可能性もある。天井部は手持ちへう削りの後ナデ。内面は丁寧なナデを施す。胎土に雲母・長石・石英の細粒子を多く含む。焼成は良好で、淡橙褐色を呈する。

17は土師器の坏。体部内外面は回転ナデ、底部はへう削り。底部外面にへう記号を施す。胎土に長石・石英・赤色粒子をやや多く含む。焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。口唇部に黒斑が認められる。



第14図 出土遺物実測図 1 (1/4)

18は土師器の小甕。体部外面は縦方向の細かい刷毛目で、内面はへう削りを施す。胎土に金雲母・長石細粒子を含む。焼成は良好で、淡橙褐色を呈している。

19は土師器の片口の鉢。底部は平底。体部外面はやや粗い刷毛目、内面はへう削り。胎土に金雲母・長石細粒子を含む。焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。底部内面に煤が付着する。15～19はS K 59出土。

20は土師器の杯の破片。底部はへう削り。胎土に金雲母・石英細粒子を多く含む。焼成は普通で、橙褐色を呈する。二次的に被熱を受けたためか、内面に剥落部分が認められる。

21は土師器の皿。底部は手持ちへう削り。胎土に長石・石英の細粒子をやや多く含む。焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。

22は土師器の盤。底部は手持ちへう削り。胎土に長石・石英粒子を含み、赤色粒子は僅かである。焼成は良好で、黄茶色～赤茶色を呈する。内外面共に化粧土を施している。

23は土師器の鉢。底部は平底で、片口になるかも知れない。外面は、体部下半から底部にかけて、やや粗い刷毛目を施す。胎土に長石・石英・赤色粒子を含む。焼成は普通で、二次的に被熱を受けている。

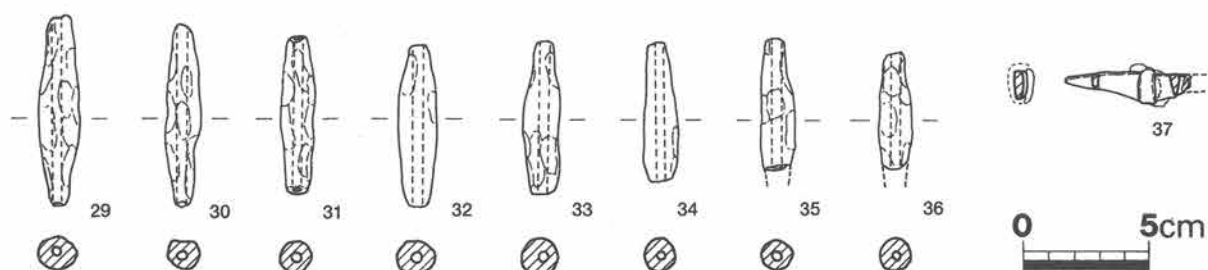
24はほぼ完形の甕。体部外面にやや粗い刷毛目、内面に削りを施す。胎土は長石・角閃石・赤色粒子を含む。焼成は良好で、色調は黄茶色～赤茶色を呈する。体部に二箇所大小の黒斑が認められる。20～24はS K 61の出土品である。

25はS P 41出土の須恵器小壺。体部および底部を欠損する。頸部から口縁部は回転ナデ。頸部内面に絞りの痕跡が窺える。胎土は長石粒子を多く含む。焼成は良好で、色調は灰色～暗灰色を呈する。

26はS P 44出土の土師器の皿で、約1/2の破片である。半分ずつが重ね合って出土した。底部は手持ちのへう削りで、赤色顔料が全面に認められる（丹塗り?）。内面は丁寧なナデ。胎土は金雲母・長石・赤色細粒子を含む。焼成は良好で、色調は黄褐色～淡茶褐色を呈する。

27は土師器の皿。ほぼ完形に近い。底部は手持ちのへう削り。胎土は金雲母・長石・石英の細粒子を多く含む。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈する。

28は土師器の皿。底部は手持ちへう削りで、別の粘土が付着する。長石・赤色細粒子を含む。焼成は普通で、色調は黄茶色～橙褐色を呈する。27～28はS P 60の出土である。



第15図 出土遺物実測図2 (1/3)

29～36は、全てS D 64出土の土錘。ほぼ同形・同大である。胎土に、金雲母・長石・石英の細粒を多く含み、赤色粒子が微量に混在する。焼成は良好で、淡褐色～橙褐色を呈する。

37は刀子の柄の部分で、刃部が僅かに残存。関部に把口金具が付いている。S P 14から出土した。

Ⅳ. ま と め

旗原遺跡周辺部での発掘調査は少ない。南西方に位置する一ノ左右遺跡で数次の調査が行われているに過ぎない。概ね弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で、竪穴住居跡や溝・甕棺などが検出されている。

今回の調査で検出された掘立柱建物跡や土坑など歴史時代の遺構は、下荒木地区では新しい知見であり、古墳時代以降にも集落が営まれ続けて来たことを肯定する資料としてその価値は非常に高い。また、国府域内やヘボノ木遺跡・下見遺跡など、久留米東部地区の一般住居は、平安時代の末まで竪穴住居が残るが、本遺跡を含む旧三潴地区の大善寺北部地区遺跡群や安武地区遺跡群などの久留米西部の地域では、古墳時代末から歴史時代にかけては掘立柱建物が一般的な集落の在り方として対照的で大変興味深い。

以下、掘立柱建物・土坑・溝・出土遺物について、明らかとなった事柄を列挙し、まとめに替えたい。

掘立柱建物は7棟が検出されている。内訳は、2×4間の南北棟建物が1棟、2×3間の東西棟建物が2棟、2×2間の総柱建物が2棟、1×2間の建物が2棟である。2×4間の南北棟建物と2×3間の東西建物は母屋、2×2間の総柱建物は倉庫、1×2間の建物は作業小屋的な要素を多分に持つ施設であり、SB66の南北棟建物を除き、これらの建物は、それぞれ1棟ずつが同時期に存在する可能性が高い。時期は7世紀後半代で、SB66の建物がやや後出するものと考えられる。建物は、SB66・67の2棟を除けば、南部に集中する傾向も認められ、調査区外の南にも建物の存在が推測される。また、西側には溝が南北に走り、さらに溝の西側にも同様の施設が存在する可能性が大きい。

土坑は大小合せて20基を検出した。その内、SK7～10は大きな不整形土坑で、7世紀後半代の時期を推定している。出土遺物も少なく、埋土の状況からも廃棄土坑とは考えられない。祭祀遺構の可能性もある。SK27は土壇墓としたが、この他にもSK51・52、SK18・33など、長方形で列状をなすことなどから、その可能性の高い遺構である。また、南端部で検出したSK59・61は、小規模の土坑で8世紀前半代の時期が推測されるが、出土遺物は多く、廃棄土坑と考えている。

溝SD6は南北方向を示す。条理の方向とほぼ一致するが、若干弧状を呈することから、断定できない。むしろ、屋敷地などを区画する区画溝や周溝の可能性が大きい。9世紀初頭まで続くものと考えている。

その他、多数のピットを検出した。特に調査区の西半分では、掘立柱建物や柵列に相当する様なしっかりしたピットが存在し、遺構の拡がりがこの西側や南側に拡大するものと推測される。

出土遺物は多くはない。須恵器・土師器が出土しているが、坏・皿類は少なく、土師器の甕や甔が多くを占めるのが特徴である。溝から出土した硯は8世紀後半代の須恵器の蓋を転用したもので、唯一の文字関係の資料である。また、SD64からまとめて出土した土錘は、中小河川で使用する漁具として興味深い。

今回の調査地点は東から西に延びる緩やかな低位段丘の先端部に位置し、北東・北西側は広大な水田が広がっている。調査区の北・東部では段落ちが認められ、遺構の密度も希薄となる傾向が窺えることから、遺跡の中心地は調査地より南或いは南西側に推定される。今後の調査に期待したい。



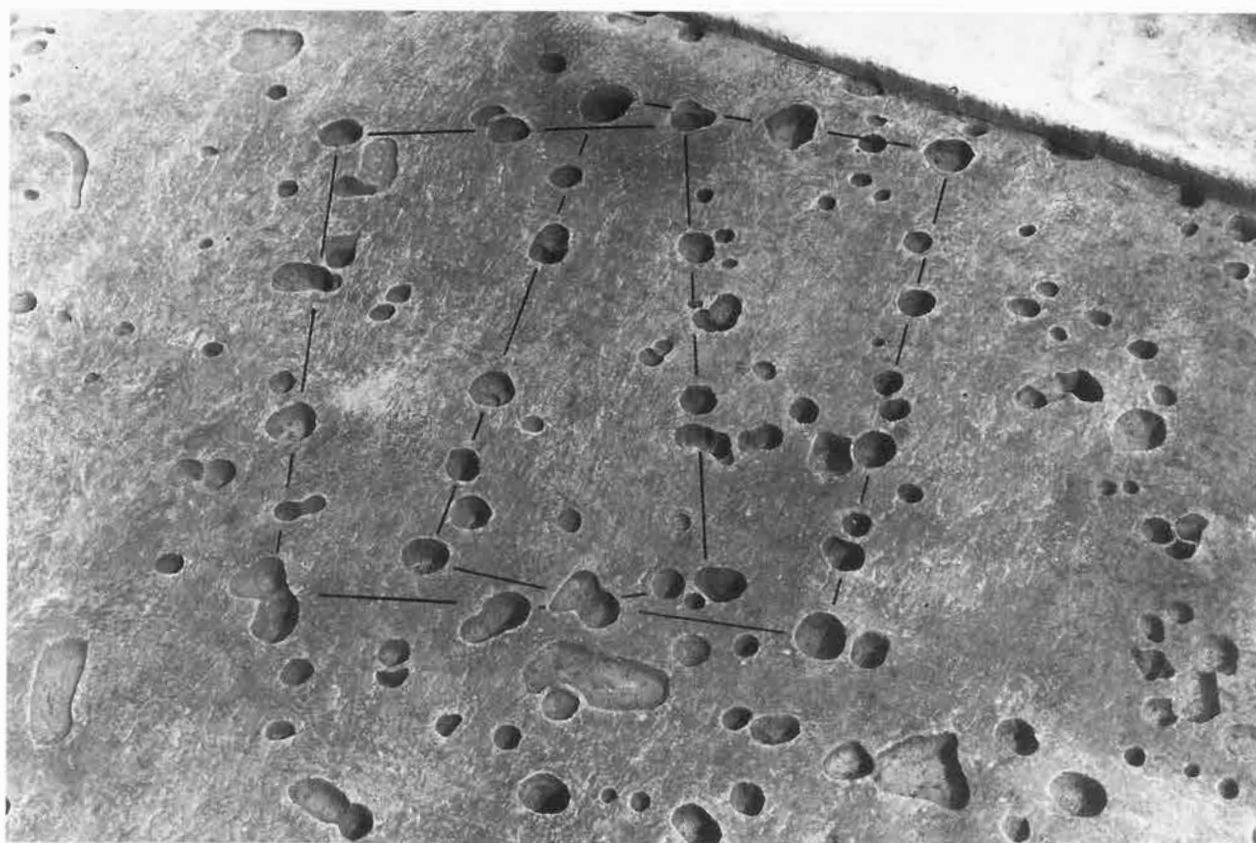
旗原遺跡全景（南西から）



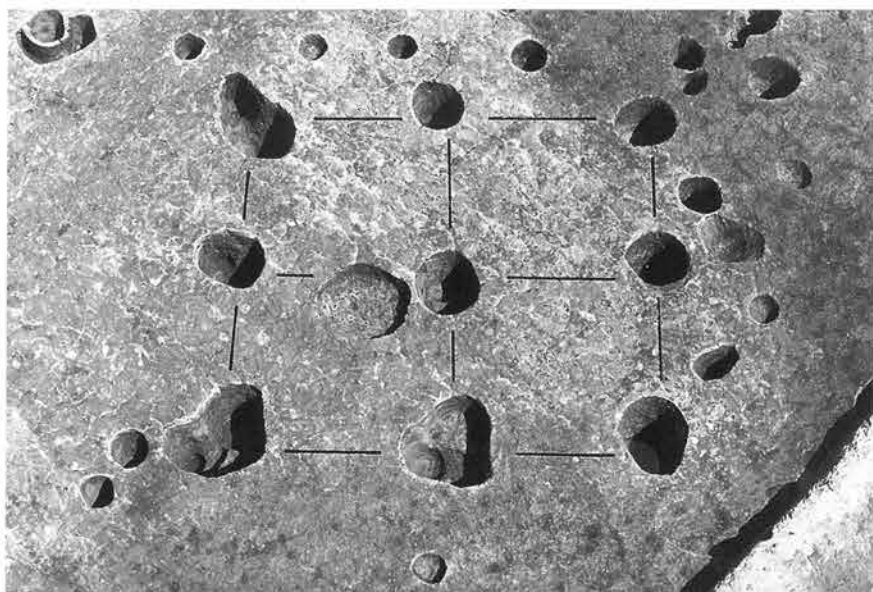
旗原遺跡全景（北西から）



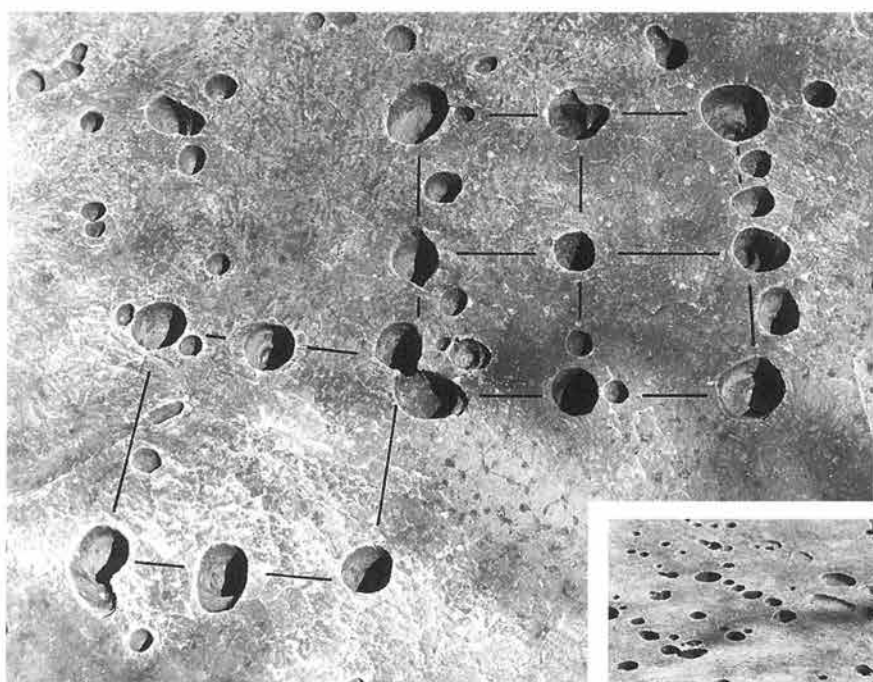
掘立柱建物跡群 (西から)



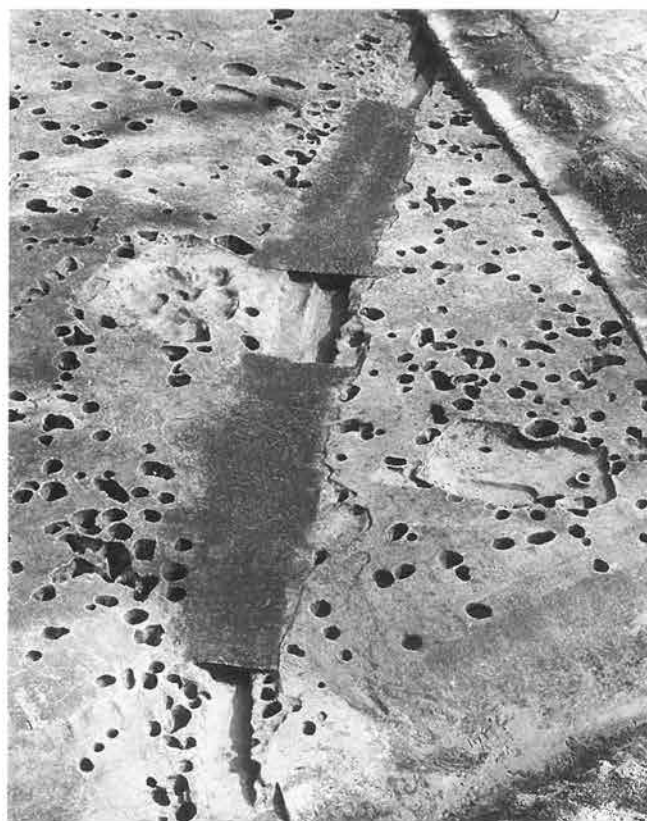
SB1・2全景 (西から)



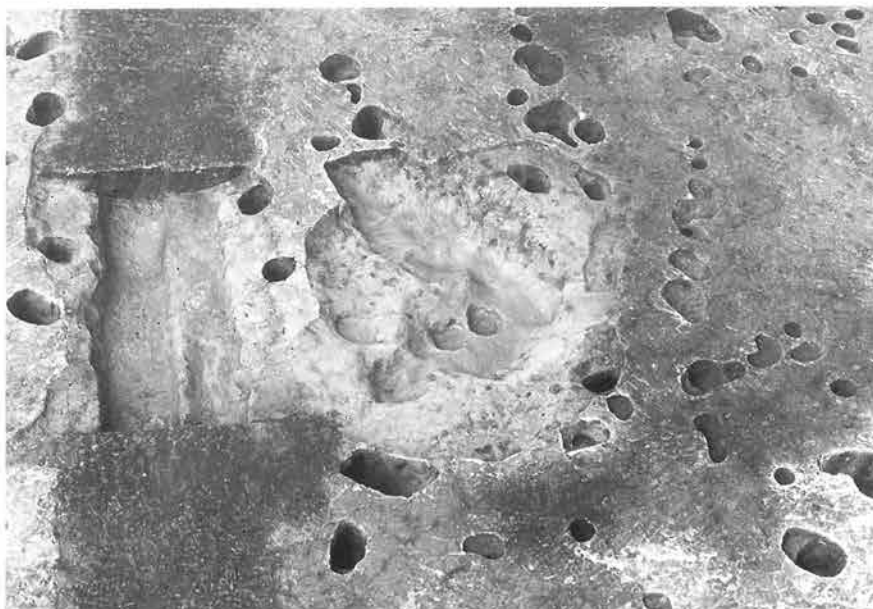
SB3全景（西から）



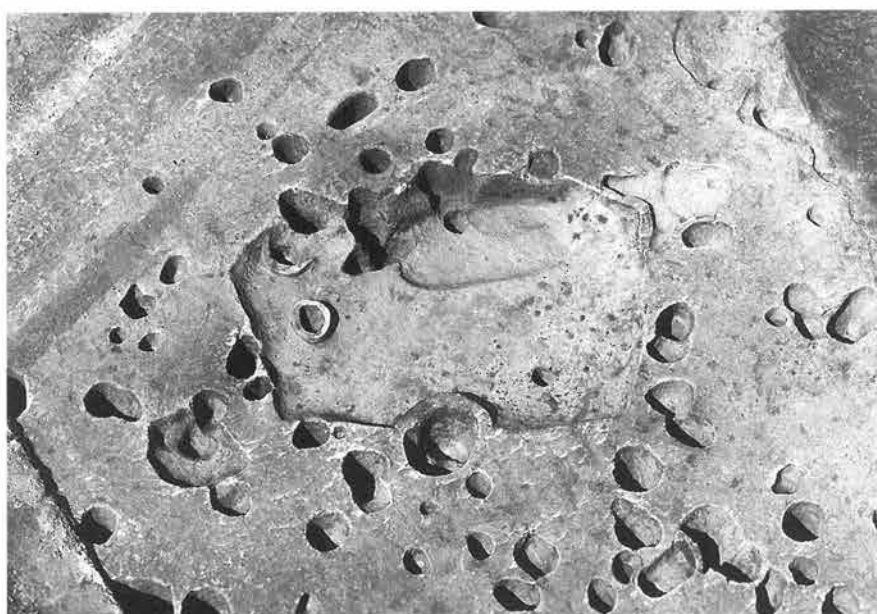
SB4・5全景（西から）



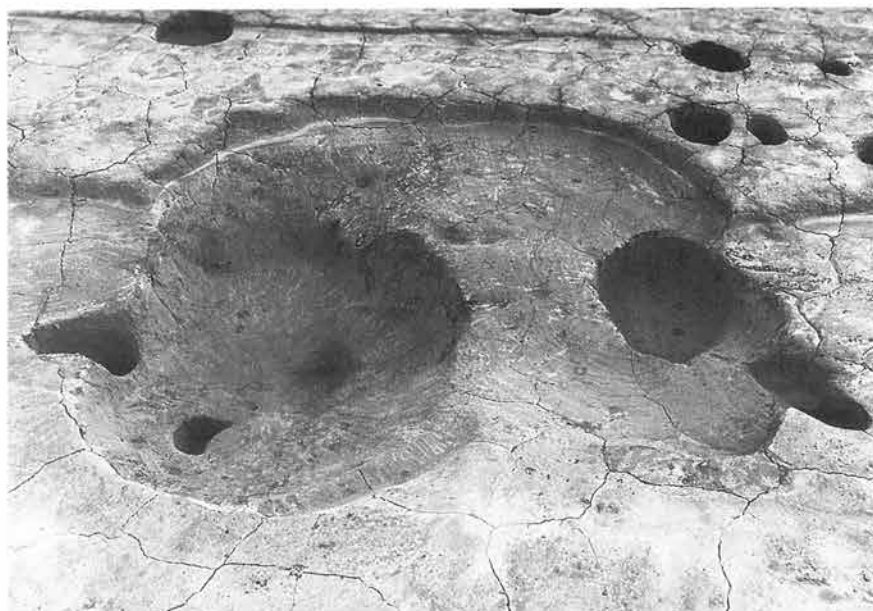
SD6全景（北から）



SK7全景（南から）



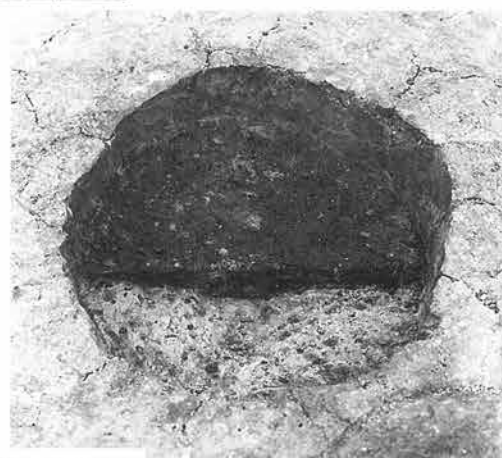
SK8全景（南から）



SK9・10全景（北から）



SK27全景（西から）



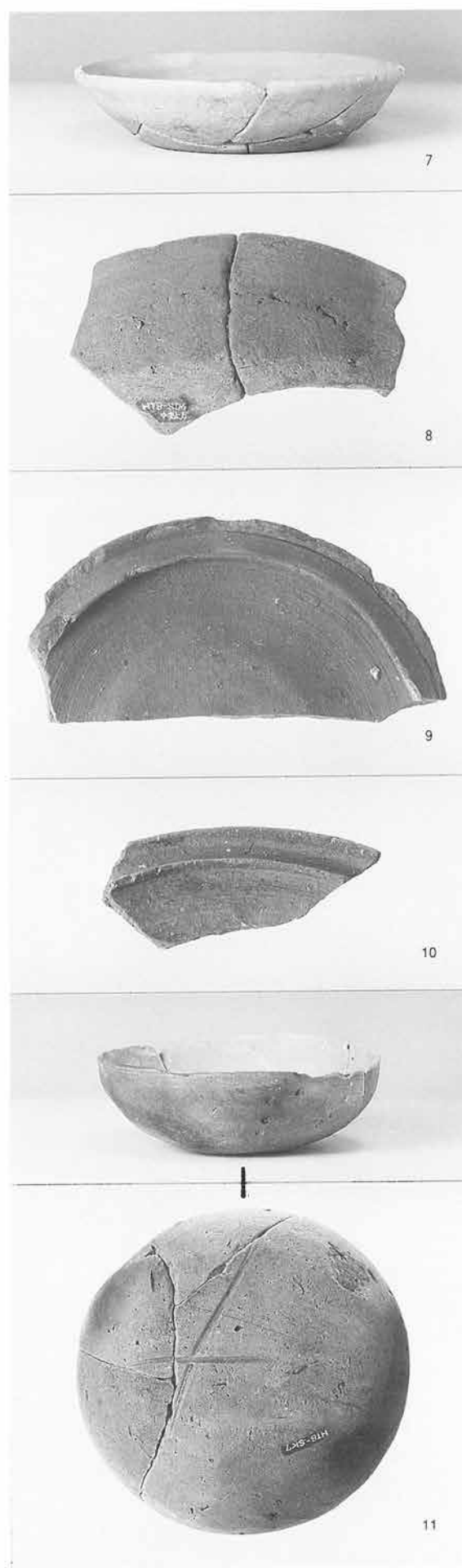
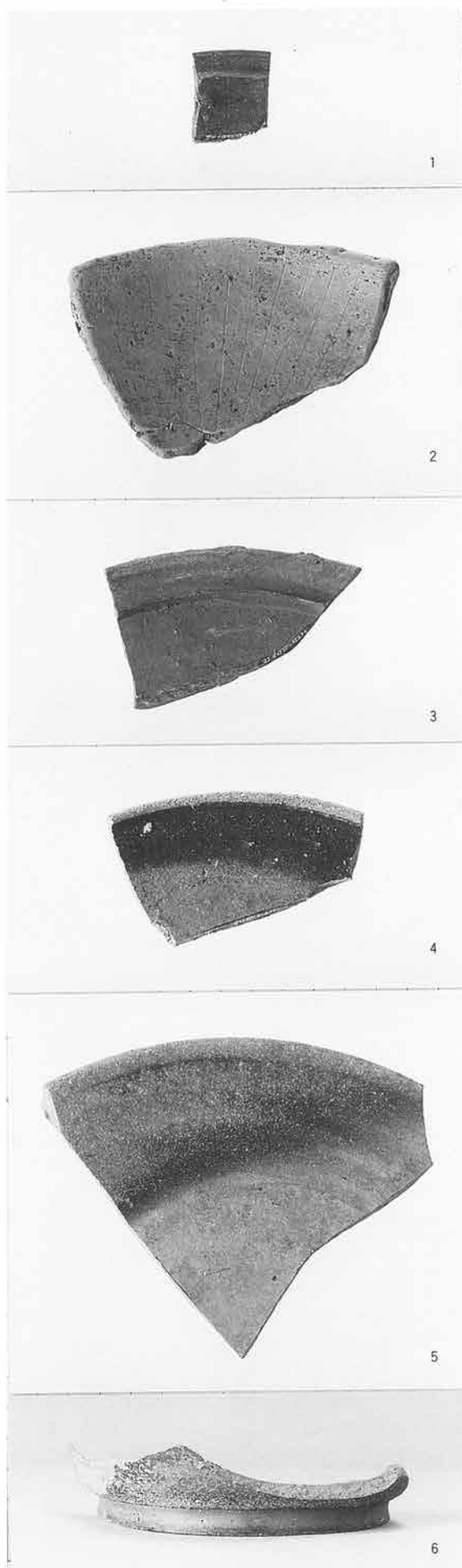
SK55木炭層出土状態
（南から）

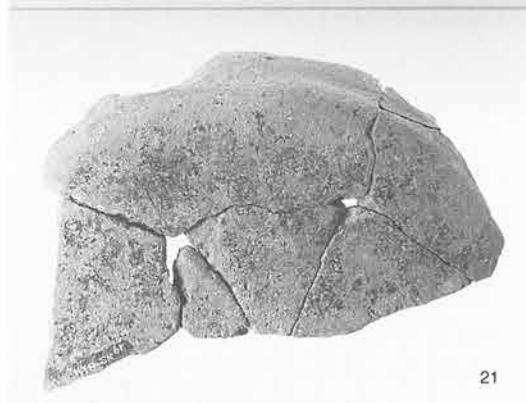


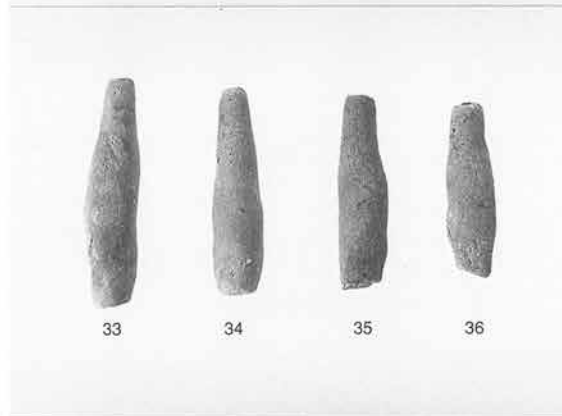
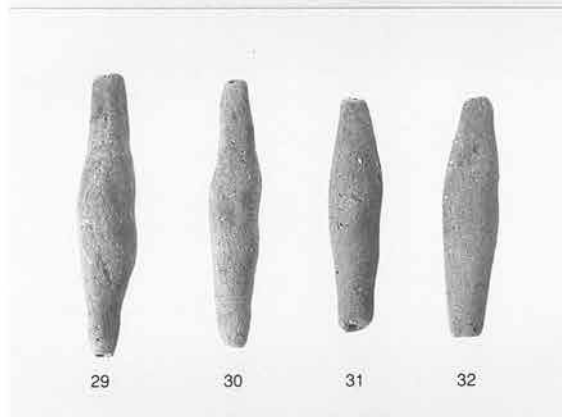
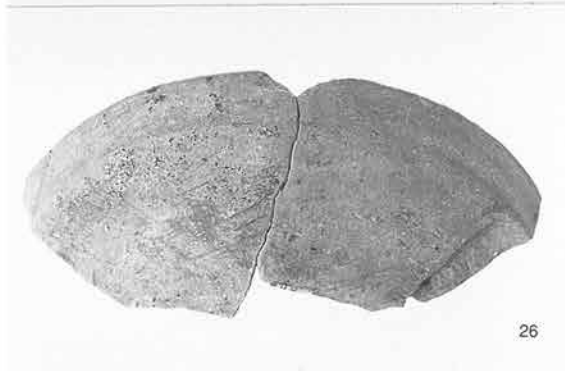
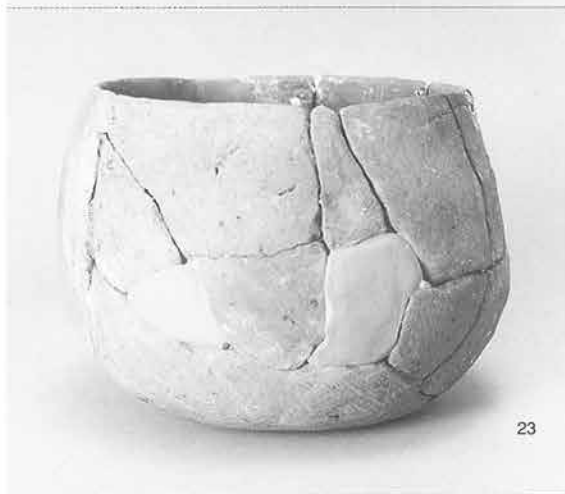
SK59遺物出土状態（北から）

SK61遺物出土状態（北から）









報 告 書 抄 録

ふりがな 書 名	はたんばるいせき 旗 原 遺 跡
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第133集
編 著 者 名	大石 昇
編 集 機 関	久留米市教育委員会
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 ☎0942-30-9225
発行年月日	平成10年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
はたんばるいせき 旗 原 遺 跡	ふくおかけんくゑいめし 福岡県久留米市 あらきまちしもあらき 荒木町下荒木 あざ 旗 原	40203		33° 15' 42"	130° 29' 19"	1997.7.28 、 1997.9.13	1400㎡	工場建設

所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
旗 原 遺 跡	集 落 跡	飛鳥 ～奈良	掘立柱建物 6棟 土坑 7基	須恵器 土師器・土錘	7C後半の建物は母屋、倉庫、作業小屋からなる。
		奈良 ～平安	掘立柱建物 1棟 溝 1条	須恵器・転用硯 土師器	下荒木地区では初の歴史時代の集落遺跡。

はたん ばる い せき
旗 原 遺 跡

久留米市文化財調査報告書 第133集
平成10年1月31日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3
編集 教育文化部文化財保護課
印刷 株式会社 東 広
久留米市御井旗崎5-1-20